



ル ソ ー

告 白

桑 原 武 夫 訳

世 界 文 學 大 系

世界文学大系 17

ル ソ ー



昭和39年4月30日発行

定価 600 円

訳 者	桑 原 武 夫
発 行 者	古 田 晁
印 刷 者	山 元 正 宜
発 行 所	株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123 電話(291)局7651

目次

告 白

桑原武夫訳

第一部

まえがき

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷

第六卷

第二部

第七卷

第八卷

第九卷

第十卷

第十一卷

第十二卷

ジャン・ジャック・ルソー

解説
年譜

ロマン・ロラン
山田・稔
桑原武夫訳

438 432 417 369 339 303 248 214 168 138 107 81 54 29 5 5

装
幀
庫
田
發

ル

ソ

l

Je voulais un nouveau genre de service à rendre aux hommes.
C'est de leur offrir l'image fidèle de l'un d'entre eux -
afin qu'ils apprennent à se connaître.

わたしは人々になすべき新しい種類の奉仕を知っている。それは彼らが自分を
知ることを学ぶために、彼らのうちの一人の忠実な映像を提供することである。

告白

第一卷

内部まで、皮膚の下まで

第一部

ころ、たとえあなたがわたしの不倶戴天の仇敵の一人であろうとも、わたしの遺骨にたいしては敵たることをやめてほしい。そして、あなたもわたしもはや生きていない時期にまで、むごい迫害をおよぼすことはしないではない——せめて一度は、あなたが性悪く復讐しようと思えばできた時に、寛大でやさしくしたという気高いあかしをえられるために。かつて一度も悪をなさず、またなそうとも欲しなかった人間にたいしてなされる悪が、もし復讐とよばれうるものとすればである。

一、わたしはかつて例のなかった、そして今後も模倣するものはないと思う、仕事をくわだてる。自分とおなじ人間仲間、ひとりの人間をその自然のままの真実において見せてやりたい。そして、その人間というのは、わたしである。

これこそは自然のままに、まったく真実のままに正確に描かれた唯一の人間像、このようなものは、かつてなく、また今後もおそらくないであろう。わたしの運命あるいはわたしの信頼が、この草稿の処置をゆだねたあなたが誰であろうとも、わたしは自分の不幸とあなたの真心にかけて、また人類の名において、この類例なく、また有用な作品を闇に葬ってしまわぬようにお願いする。これは、確かにこれから開始しなければならぬ人間研究にとって、最初の対照書類として役立ちうるものである。そしてまた、わたしの敵どもによって歪曲されてはいないわたしの性格の唯一の確実な記録を、わたしの死後の名譽から除かぬようにお願いする。つまると

二、わたしひとり。わたしは自分の心を感じている。そして人々を知っている。わたしは自分の見た人々の誰ともおなじようには作られていない。現在のいかなる人ともおなじように作られていないとあえて信じている。わたしのほうがすぐれてはいないとしても、少なくとも別の人間である。自然がそのなかへわたしを投げこんで作った鋳型をこわしてしまったのが、よかったかわるかったか、それはこれを読んだ後でなければ判断できぬことだ。

三、最後の審判のラッパはいつでも鳴るがよい。わたしはこの書物を手にして最高の審判者の前に出て行こう。高らかにこう言うつもりだ——これがわたしのしたこと、わたしの考えたこと、わたしのありままの姿です。よいことも

(1) この題名のないノートは、ジュネーヴ草稿にのみ見出される。

(2) ベルセウス『諷刺詩』三ノ三〇。

わるいこともおなじように率直にいいました。何一つわるいことをかくさず、よいことを加えもしなかった。多少どうでもいい装飾を用いたところがあれば、それはわたしの記憶の喪失でできた空白をうめるためにしただけです。真実でありうると考えた場合のみ真実として仮定したけれど、偽りと知ってそうしたことは決してない。自分のありのままの姿を示しました。わたしは事実そうであった場合には軽蔑すべきもの、卑しいものとして、また事実そうであった場合には善良な、高貴なものとして書きました。あなた御自身見られたとおりに、わたしの内部を開いて見せたのです。永遠の存在よ、わたしのまわりに、数かぎりないわたしと同じ人間を集めてください。わたしの告白を彼らが聞くがいいのです。わたしの下劣さに腹をたて、わたしのみじめさに顔を赤くするなら、それもいい。彼らのひとりひとりが、またあなたの足下にきて、おのれの心を、わたしとおなじ率直さをもって開いてみせるがよろしい。そして、「わたしはこの男よりもいい人間だった」といえるものなら、一人でもいつてもらいたいのです。

一、わたしは一七二二年にジュネーヴで、市民イザック・ルソーと同じく市民シユザヌ・ベルナルのあいだに生まれた。ごくとほしい財産を十五人の子供たちのあいだで分けねばならぬため、わたしの父のもらう分け前はほとんど無にひとしくなったので、父は時計師の職を

唯一の生計の道としなければならなかった。父はこの職ではじつさい腕達者であった。わたしの母はベルナルという牧師の娘で、父より金持だった。聡明で美しいひとだった。父がこの母を妻としたのはなみなみの苦勞ではなかったのだ。二人の恋はほとんど生まれると同時にじまっていた。八つか九つのときから、二人はラ・トレイユの大通りを毎晩いっしょに散歩した。十のとき、もう互いにはなれられない仲だった。共感、心の一致が習慣によつて生まれた。気持をいよいよ固くした。二人とも生まれつきやさしく感じやすい性質だったから、誰かの心の中に自分と同じ気持を見出すことのできる時を、ひたすら待っていた。というよりむしろ、この時機のほうが彼らを待っていた。そこで双方が、受けいれるべく開いてくれた最初の心の中に、自分の心を投げこんだのだ。二人の恋を邪魔するような事情がかえつてこれをはげしくさせた。恋人をえられない青年は悲しみにやつれていった。女のはうでは忘れるために旅に出ることをすすめた。旅行したが、ききめはない。前より恋をつのらせて帰ってきた。女は優しく心変りしていなかった。こうした試練があつて後、もう二人には生涯愛しあうしか道はなく、それを誓った。そして天意は二人の誓いをまっとうさせた。

二、母の弟のガブリエル・ベルナルが父の妹の一人を恋するようになった。が、彼女は自分の兄が先方の姉と結婚するという条件でなけ

れば、自分も結婚しないといった。恋が万事を解決した。そして、同じ日に二組の結婚式が行なわれた。こうして、わたしの叔父はわたしの叔母の夫となり、子供たちは二重の従兄弟ということになった。子供は一年たつと両方の家に一人ずつ生まれた。まもなく、わたしたちは遠く別れねばならなくなった。

三、叔父のベルナルは技師だった。叔父はユッジーヌ公につかえて帝国やハンガリーに行った。彼はベルグラードの攻囲戦や野戦で武勲を立てている。わたしの父は、わたしのただ一人の兄が生まれて後、招かれてコンスタンチノーブルへ行き、トルコ宮廷付の時計師となつた。父の留守中、母の美貌、その聡明で諸芸のできることは人々にもはやされた。フランス公使のラ・クロジュール氏はなかでもっとも熱心な一人だった。それから三十年後に、わたしに母のことを話して感慨ぶかそうだった様子をわたしは見たから、当時の恋慕ははげしかったにちがいない。わたしの母は身をまもるのに貞操以上のものをもっていた。夫を心から愛していたのだ。早く帰国するようにといつてやる。夫は何もかも捨てて帰った。わたしはこの帰宅がみのらせた悲しい結実である。十月たつて、わたしは病弱な子として生まれた。わたしが生まれたために母は死んだ。こうしてわたしの誕生はわたしの不幸の最初のものとなった。

* 彼女はその身分としては、かがやかしすぎ

るほど諸芸ができた。彼女を熱愛した父の牧師が教育にたいへん気をつかったからだ。彼女は絵をかき、歌をうたい、テオルプ（マンドリニンにた楽器）でみずから伴奏し、本をよく、かなりな詩をつくった。ここに示すのは、弟と夫が不在のとき、義妹と二人の子供と散歩しながら、誰かがこの二人のことについて話したことをふまえて、つくった即興詩である。

遠くへ行った二人の紳士は

わたしたちにはさまざまになつかしい

わたしたちの友です、恋人です

わたしたちの夫です、兄弟です

そしてこの子らの父親です。

四、父がどうして妻をなくした悲しみにたえたか、わたしは知らないが、とにかく一生なさめられなかったことはよく知っている。父はわたしを母の身がわりと考えていた。しかもわたしは彼女を彼からうばったことは忘れなかった。わたしを抱いてくれるとき、いつも父の溜息や身ぶるいする抱擁に、彼の愛撫に、にがしい後悔がまじっていることを感じぬことはなかった。だから父の愛撫はよいけにやさしくもあつた。「ジャン・ジャック、母さんの話をしよう」と父がいうと、「ええ、お父さん、また泣くんでしょう」とわたしは答えたものだ。これをきくだけで、父の眼には涙があふれた。「ああ」と、せつなそうにいう。「母さんをかえし

てくれないか。お父さんをなぐさめておくれ。母さんがわたしの心につくって行った穴をふさいでおくれ。おまえがただわたしの子だというだけだったら、こんなに可愛いだろうかしら？」この母をなくしてから四十年後に、父は二度目の妻の腕に抱かれて死んだ。しかし、口に最初の妻の名をよび、心の奥にはわたしの母の面影をうかべていたのだ。

五、わたしに生命をあたえてくれたのは、こういう人たちであつた。天が彼らにさずけた性質のうち、感じやすい心、この一つだけをわたしにつたえてくれた。この心は父母には幸福のたねだったが、わたしの一生ではあらゆる不幸のたねとなつた。

一、わたしは生まれたとき、ほとんど死にそうな子だつた。育ちそうなるふうではなかった。わたしはある病気の萌芽をもつて生まれたが、それは年月とともにのつて行き、今ではほんのときどきしか休ませてくれない。その病気のたえまは、また別の悩みにいつそうひどく苦しめられるのだ。父の妹の一人で、独身の、やさしいつつましい叔母がわたしをよく世話してくれ、いわばわたしの命を救ってくれた。わたしがこれを書いているいま、この叔母はまだ生きている。すでに八十になつて、年下の、飲酒でからだをこわしてしまつた夫を介抱している。やさしい叔母さん、わたしはあなたがわたしを生かせてくれたことは許してあげましょう。あ

なたの老後に、わたしの一生のはじめにあなたがつくしてくださつた慈愛のこもつた世話の御恩がえしをできないことは何とも残念です。それから、女中のジャクリヌもまだ頑健で生きている。わたしが生まれたとき眼を開いてくれた手が、わたしの死ぬときまたこの眼を閉じてくれるにちがいない。

二、わたしはものを考える前にまず感じた。これは人間の通有性であらう。ただ、わたしはほかの人よりも強くこれを経験した。五、六歳

(1) 六月二十八日生、七月四日洗礼。

(2) デイディエ・ルソーは、パリ近くのモンエリ出身で、一五四九年に宗教上の理由でジュネーヴに移住した。ジャン、ダヴィドの二代をへて、イザックにいたる。彼は家業

の時計師の徒弟奉公をへて、一時ダンス教師となつたが、あとは時計師をつづけた（一六七二—一七四七）。

(3) シュザンヌは一六七三年にやはり時計師の娘として生まれ、九歳のとき父を失ひ、伯父ベルナル牧師に養われた。結婚（一七〇四年前、風紀上の戒告を受けたことがある。伯父から六千、母から一万フロランの遺産をもらつた。

(4) ガブリエルとテオドラ・ルソーの結婚は、じつは五年前の一六九九年であつた。

(5) 一七一七年、ユウジェニス公がトルコ軍を撃破した戦。学者の考証によると、ベルナルは一七二一年に補國しており、この戦には参加していないという。

(6) フランソワ、一七〇五年生まれ。

(7) 七月七日死。

(8) 尿閉症。別の悩みとは彼のうけた迫害をさす。

(9) シュザンヌ・ルソー（一六八一—一七七五）。四十八歳のとき、ニヨンの市民ゴンズリヌと結婚した。愛称シュン。

(10) ジャクリヌ・フアラマン。靴屋の娘、一七七七年死。

の時まで、したことは覚えていない。どんなふうにして読み方を覚えたかもわからない。ただ最初に読んだ本のことで、それがわたしにあたえた影響のことしか思い出せないのだ。わたしは、この時からである。わたしの母は小説類をのこしておいた。わたしは、父とわたしは、夕食後、それを読みはじめた。はじめに面白い本を見せてわたしに読書力をつけるのが目的だったが、だんだん興味が強くなって、かわりばんこにやすみなしに読みつづけ、毎晩を読書にすごした。一冊のおわりまで読まなければやめられなかった。ときどき、父は明けがたツバメの声をきいて、恥ずかしそうに、「さあ、もう寝ようよ。わたしのほうがおまえより子供だね」といったものだ。

三、まもなく、こういう危険な方法で、すらすら読んだり、わかつたりする力がついたらばかりでなく、人間の情熱について、わたしの年ごろとしては例外といつていい理解力を得てしまった。まだ実際の事柄がどんなことかまるで知らないくせに、あらゆる感情がもうわたしにわかつていた。まだ何も理解しないのに、すべてを感じた。こういう漠とした情緒をつぎつぎ味わって行つたけれども、まだ理性をもたなかったから、理性がおかされることはなかった。しかし、こういう情緒はわたしにいつぶ変わつた理性をつくつてしまい、人生について奇妙な小説的な考えをいだかせるにいたつた。これは

経験や反省の力でどうしても矯正できないものだった。

四、小説は一七一九年の夏で終わった。つぎの冬は様子が変わる。母の蔵書をすっかり片づけたので、母の父のものでわたしたちの手もとにきていた本を読むことにした。さいわい、そのなかにはいい本があった。というのも不思議ではない。こういう本を集めた人は牧師で、しかも当時の流行として博識な、そのうえ趣味もあり機知もゆたかな人だったからだ。ル・シェウールの『教会と帝国の歴史』、ボッシュエの『世界史論』、ブルタルコスの『偉人伝』、ナニの『ヴェネチアの歴史』、オヴィディウスの『変形談』、ラ・ブリュイエール、フォンテネルの『世界』と『死者の対話』、モリエールの幾冊か、

こういうものが父の仕事部屋にはこびこまれて、父が仕事をしているあいだ、わたしはそばで読んで聞かされた。わたしはこの読書に自分の年ごろとしては稀な、おそらくほかに例のないほどの興味をおぼえた。なかでもブルタルコスが愛読書になった。たえずくりかえしこれを読んだおかげで、小説の影響から少しいやされた。そして、まもなくオロンドート、アルタメース、ジュバなどという人物より、アゲシラス、ブルトゥス、アリストイデスなどが好きになった。こういう興味のある読書や、それが機会になつて父とわたしのあいだにかわされた会話から、わたしの自由で共和主義的な精神がつくられた。束縛や隷属をがまんできぬ、この奔放な自尊心

のつよい性格は、一生を通じて、そういうものが飛び出しては都合のわるい場合に、いつもわたしを苦しめたものである。たえずローマやアテナイのことを考え、いわばそういう都市の偉人たちとともに生きていたので、しかもわたし自身が共和国の市民として生まれ、祖国愛をもっとも強い熱情としていた父の子であつたために、わたしもまたそれにならつて祖国愛に燃えていた。わたしはギリシア人やローマ人気取りだった。伝記で読んだ人物になりきつていた。意志堅固や勇猛の話に感激して、眼はかがやき、声も男らしくなつた。ある日、食卓でスカエヴォラの武勇談を話しながら、その仕草をまねて、わたしが歩いて行つて皿をあたためる器具の上に手をのせるのを見て、皆はきもをひやしたものだ。

五、わたしには七つ年上の兄がいた。この兄は父の職業を見習つていた。わたしを可愛がるあまり、この兄のほうは少しなおざりにされていたかたちで、これはよくないことだった。彼の教育にもこのなおざりのあとが明らかであつた。ほんとうの道楽者になる年ごろより前に、すでに不品行の習慣をつけてしまつた。ある親方の家へ見習に出されたが、父の家から逃げたように、そこからも何度も逃げ出した。わたしはこの兄にはほとんど会わず、ほとんど親しくしたともいえないほどだ。それでも愛情を感じていたことにはかわりはない。向うでも、放蕩者（ほうとうしや）が何かを愛することができるものなら、その程

度の愛情はもつていた。こんなことも思ひ出す。あるとき、父が怒つて兄を乱暴に折檻したので、わたしはげい勢いで二人のあいだにとびこんで、兄を力いっぱい抱いた。そうやって兄のからだを自分の身でかばい、かわりにぶたれながら、この姿勢のまま動かなかったので、わたしの泣き声や涙に閉口したのか、それとも兄よりわたしをひどい目にあわすことはしたくなかつたのか、父は許すより仕方がなかった。その後、兄はいよいよ不良になつて、家を飛び出し、まったく行方が知れなくなつた。しばらくして、ドイツにいることがわかつたが、一度のたよりもよこさなかつた。この時から消息がたえてしまい、こうして、わたしは一人息子になつてしまったのだ。

六、この不幸な子がおざりに育てられたにしても、弟のほうはそんなものではなかつた。国王の子供でも、わたしが幼いころにうけたような気のくばりようで世話はされないうらう。周囲から偶像あつかいされ、そしてこれほもと稀なことだが、可愛がられはしたが決して甘やかされはしなかつた。わたしは父の家を出るまで、ただの一度も往来でよその子供と駆けまわつたりすることは許されなかつた。こうした気まぐれな性癖のただ一つをも、わたしはひとから抑えられ、または満足させられる必要がなかつた。こうした性癖を世間では自然のせいに戻しているが、実はまったく教育から生まれるものなのだ。わたしは年齢相応の欠点をもつて

いた。おしやべりで、食いしんぼうで、ときどきはうそつきだつた。果実やボンボンや食べものを失敬することもやりかねなかつた。しかし、決して悪事をしたり、ものを傷つけたり、他人に罪をきせたり、あわれな動物をいじめたりすることを、快く思つたことはなかつた。しかし、たつた一度、近所のクロの奥さんというひとの鍋の中へ、このひとが説教をききに出かけている留守に、小便をしたことを覚えていた。正直にいって、この思い出がうかぶと、今でも吹き出してしまふ。クロの奥さんは、いい人だつたけれど、わたしが一生で出会つた一番の小言やの婆さんだつたからだ。わたしがごく幼いときにした悪事の短い正真の話は、これっきりだ。

七、眼のまえにはやさしさの典型のような人ばかりを、周囲にはこの世でもっとも善良な人々ばかりを見ていたわたしが、どうしていいじわるな子になれただろう。父も叔母も女中も親類の者も知人も近所の人々も、わたしのまわりのみんなが、正直のところ、わたしのいいなりになつてはくれなかつたけれども、わたしを愛してくれ、わたしもまたその人々たちを愛していた。わたしの意志はすこしも刺激されず、すこしも逆らわれなかつたから、意志をもっているなどという自覚はてんでわたしには生まれなかつた。ある親方のところへ徒弟奉公に住みこむまで、わたしは気まぐれな欲望などというものを知らなかつた、と誓つてもいい。父のそばで読んだり書いたりして過ごす時間や、女中につ

れられて散歩に行く時のほかは、いつも叔母といっしょにいた。そばに立ったり坐つたりして、叔母が編物するのを見たり、歌うのを聞いたりしながら、わたしは満足だつた。彼女の愛嬌、やさしさ、かわい顔などはたいへんつよい印象を残したので、いまだにその様子、眠つき、態度が眼にうかぶ。やさしいちよつとした言葉もおぼえていた。どんな着物をきていたか、どんな髪形だつたかともいえるし、当時はやりで、黒い髪の毛が額の上に小さく巻いて垂れていたので忘れない。

八、わたしはこの叔母から音楽の趣味、というより情熱をおしえられたと信じている。もつともこれはずっと後に発達したのだけれども、叔母は歌謡を不思議なほどたくさん知つていて、やさしいすんなりした声でうたつた。このすばらしい独身婦人の晴々とした気象は、彼女自身から周囲のものからも、物思ひや悲しみを遠ざ

(1) 主としてオノレ・デュルフェの『ラストレ』など、十七世紀の空想的恋愛小説。

(2) オノレ・デュルフェはラ・カルブルネードの小説『カサンドリ嬢の小説の題名、ジュバはラ・カルブルネードの『クレオパトラ』の人物。アゲシラス以下は『偉人伝』に出てくる人物。ルソーはアルタコス、アミヨの仏訳でよんだ。

(3) ローマの英雄。敵陣にしのび込み、敵將を刺そうとしたが、あやまつて従者を殺し、とらえられて拷問をうけたが、彼は祭壇上にもえる神火に右手をつきつけ、平然としていた。敵將はその勇氣に感動して許したという。

(4) フランソワ。一七〇五年三月十五日生まれ。

けた。叔母の歌の魅力は非常なものだったので、その歌のいくつもがいつまでも記憶に残ったばかりでなく、もう記憶力のなくなった今日、子供のときからすっかり忘れていたようなもので、老いゆくとともに新しくよみがえってきて、言葉にはあらわせない魅力をおぼえるのだ。心労と苦痛にすりへらされた、わたしのような老いばれが、ときどきこんな歌の節々をもうかすれた、ふるえ声で口ずさんで、思わず子供のように涙を流していることのあるのを、誰が知っていたら？ その歌のなかに一つ、節まわしだけはちゃんとおぼえているのがある。脚韻はほんやり浮かんでくるのに、後半の歌詞はいくら骨折ってみてもいつも浮かんでこない。その初めの部分と思いい出せる残りの文句はこうだ。

Tircis, je n'ose

Ecouter ton Châteauneu

Sous l'Ormeau;

Car on en cause

Déjà dans notre hameau.

.....

..... un berger

..... s'engager

..... sans danger;

Et toujours l'épine est sous la rose.

こんな歌が、わたしの心にどうして情味ふかい魅力があるのかと、考えてみる。自分にもわ

けのわからない気まぐれだ。とにかく涙にさえぎられて、どうしても最後までうたえなくなってしまう。この歌詞の忘れたところを知っている人でもあれば、教えてもらおうと思ひ、パリ手紙を出すことを何度も考えた。しかし、もしシュゾン叔母さん以外の誰かが歌ったとわかれると、この歌を思ひ出す楽しみも大かた消えてしまうことは確かなのだ。

九、わたしが生活へ足をふみ入れたころの最初の愛情はこういうものであった。このように尊大であると同時にこのように柔和なこの心、女性的でありながら、しかも不羈なわたしの性格はこうしてつくられ、あるいは現われはじめた。そしてこの性格は弱気と勇気のあいだを、柔弱と徳操のあいだを始終ぐらつて、あくまでわたしをわたしの自己と矛盾させ、禁欲と享楽、快楽と節制、そのどちらをも取りにがす結果にしてしまった。

一〇、こうしたわたしの教育の進路がある出来事によつて中断せられて、その結果がその後わたしの生活を左右することになった。わたしの父は、フランスの大尉で市会に縁者のあるゴティエという人と喧嘩をした。この傲慢で卑劣なゴティエという男は鼻血を出し、復讐をはかつて、父が市中で剣を抜いたと訴えた。牢へ入れられそうになった父は、法律どおり告発者も同様に監禁されるべきだと主張したが、いれられず、名誉と自由をそこなわれるのを我慢するより、ジュネーヴを去って、余生を他国

で暮らすほうをえらんだ。

一一、わたしは当時ジュネーヴの築城工事に雇われていたベルナル叔父に後見されて、残ることになった。叔父の長女はなくなつたが、わたしと同じ年の男の子がいた。わたしは二人はボセーのランベルシエ牧師のところへ寄宿にやられた。ラテン語と教育という名で教えられるこまごましたくだらぬことを、そこで勉強するためだった。

一、この村ですごした二年間は、わたしのローマ人気取りの荒い気象を少しやわらげ、子供らしい気持にもどしてくれた。何一つ課せられなかったジュネーヴでは勉強や読書が楽しかった。それがほとんど唯一の娯楽だった。ボセーでは勉強させられるので、息ぬきの遊びが楽しみになった。田園はわたしには目新しく、それを楽しむことに飽かなかつた。田園を愛する気持はたいへん強く、これは終生消えなかつた。この村ですごした幸福な日の追憶は、その後いつの時もわたしにこの生活や楽しさをなつかしげらせ、それは再びこの地をおとずれた日までつづいた。ランベルシエ氏は、われわれの教育をなげやりにはしなかつたが、無理な宿題を課するようなことはせず、ごくもの分りのいい人だった。この人のやり方のよかつた証拠に、束縛というこの大嫌いなわたしでさえ、当時の勉強の時間を思ひ出して不愉快な気が少しもしない。また、この人から多くのことを学びはし

なかつたけれど、学んだことはらくに学んだし、また覚えたことは少しも忘れていない。

二、この田園生活の純朴さは、友情というものにわたしの心を開いてくれたことで、じつに計りしれぬ利益があった。それまでわたしは高尚だが空想的な感情しか知らなかった。平和な静かな環境で共同生活する習慣が、わたしと兄弟のベルナルを、愛情で結びつけた。まもなくわたしは彼に、兄にいだいたよりずっと親身な気持をもつようになり、これがいつまでも消えなかった。彼は背の高い、やせぎすの、弱い少年で、からだが弱々しいように心も柔和だった。わたしの後見人の息子だといふので家で大切にされるのを笠にきる、などといったこともあまりない。わたしたちの勉強、娯楽、好みはみな同じだった。どちらも一人ぼっちで同じ年で、どちらも友達がほしかった。二人を引きはなすことは、殺すも同然だった。互いの友情を実証するような機会はあまりなかったけれど、友情はずいぶんはげしくて、片時も離れて生きていられぬのみならず、わかれる時があらうなどと考えもしなかつたくらいだ。二人とも優しくされると、すぐうれしくなるたちだし、強いられなければ愛想よしかったから、どんなことでも考えが一致した。監督している人たちのひいきで、その目の前では彼のほうがいくらか羽ぶりがいいかわりに、二人だけでいる時には、わたしのほうにいくらか分がある、というわけでちゃんと均衡が保たれた。学課のとき彼

がこまると、わたしはそつと助言してやった。

わたしの作文が書けしまうと、彼のほうを手つだつてやる。遊びではいつもわたしの活潑な好みが先導役をつとめた。こうしてわたしたち二人の性格はびつたり合ひ、友情は真ごころのこもったものだったから、ボセーやジュネーヴでほとんど片時もわかれずにくらした五年あまり、正直のところ、よく喧嘩はしたけれど、ひとが引きはなす必要などなく、その喧嘩も十五分以上つづいたことは一度もない。ひとに告げ口したりしたことなど一度もなかった。こんな指摘は大人げないかもしれないが、このような例は子供の世界でも、おそらくほかに類があるまい。

三、ボセーの生活は、すっかりわたしに適したものだつたから、これがもつと永續きさえすれば、わたしの性格もすっかり固まつたにちがいない。やさしい、情味のゆたかな、平和な感情がその土台になっていた。人間のなかでわたしほど生まれつき虚栄心の少ない者はないと思う。興奮して一気に高尚な感情にまで高まることもあるが、すぐまたいつものものうい気持に落ちこんでしまうのだ。自分に近づくとすべての人から愛されたいというのが、わたしのもつとも強い欲望だった。わたしはおとなしかったし、従兄弟もおとなしい。わたしたちを監督している人たちもやはりそうだった。まる二年間というものの、わたしは荒々しい感情を見もしなければ、その犠牲になったこともない。何もかもがわたしの心のうちに、わたしが自然から受けた

ままの氣質を育ててくれた。みんながわたしについて、またあらゆることについて満足している様子を見るほど楽しいことはなかつた。聖堂で教理問答に答えるとき、つい行きづまってしまつて、ランベルシエ嬢の顔に心配そうな苦しさうな表情を見ることがほど、つらいことはなかつたが、これは一生忘れまい。それは、大勢の前でしくじる恥ずかしきよりもつらかつた。人まえでの失敗もひどくつらかつたのだけれど。というの、はめられることにはいっこう無関心だが、恥をかくことには特別に敏感だったからだ。そしてわたしはランベルシエ嬢に叱られ

(1) 完全な歌詞は、

Tircis, je n'ose
Ecouter ton chameau
Sous formeau;
Car on en cause
Dejà dans notre hameau.
Un cœur s'expose
A trop s'engager
Avec un berger;
Et toujours l'épine est sous la rose.

(大意) ティルシスさん、わたしはもうしませう。ニレの木の下で、おまえの笛をきくことは。だって、もう村ではうわさが立っている。羊飼いとあまり深まになるのはあぶないよ。バラの下にはいつもトゲがある。

(2) ジュネーヴの南、約五キロの小村。政治的にはサヴォワに、宗教的にはジュネーヴに属していた。

(3) ジャン・リジャック・ランベルシエ(一六七六—一七三三)は、一七〇八年からボセーの牧師で、暮つ下の妹ガブリエル(一六八三—一七五三)といっしょに暮らしていた。

る。心配よりも、このひとを悲しませることのほうが気がかりだった、とここにはつきりいうことができる。

四、しかし、彼女も必要な場合に厳格さに欠けてはいなかったことは、兄さんとおなじだった。だが、その厳格さはほとんどいつも道理にかなっていて、決して一時の興奮のせいなどではなかったから、わたしはつらく思っただけれど、反抗心は少しも起こさなかった。罰をうけることより、相手の心持をわるくするのがいやで、不機嫌な顔を見るのが折檻よりつらかった。これ以上うまく説明するのは少しむずかしいが、いっておかねばならない。ひとがいつも無差別に、そしてしばしば無考えに行なっている方法が、将来どんな影響をおよぼすかを、もう少しよく見きわめたなら、子供のあつかい方もどんなに変わるだろうか！ ごくありふれた、そして忌むべき一つの実例から、大きな教訓をひき出しうることもあろうかと考えて、わたしは思いついて、その実例を話すことにする。

一、ランベルシエ嬢はわたしたちに母のような愛情をもっていただけに、また母らしい威厳をもっており、わたしたちが悪いことをしたときにはときどき、子供がよくうけるような折檻を行なうこともあった。彼女はかなり長いあいだ、おどかしただけにとどめたけれど、わたしはその新しい罰のおどかしだけでふるえ上がったものだ。だが、実際にそれをやられてみると、

あらかじめ心配したほど恐ろしいものではなかった。それより、じつに奇妙なことに、この懲罰は罰をくわえた人をいよいよ好きにした。この愛情に真実があったのと、わたしの生まれつきのおとなしさがあったからこそ、わざと悪いことをして、同じ扱いをまたしてもらおうといった誘惑をよく抑えることができたのだ。というのは、苦痛のうち、恥ずかしさのうちにさえ、一種の肉感がまじっているのを感じて、おなじ手によってもう一度それを味わいたい欲望のほうに、恐怖よりつよくなったからである。これにはたしかに早熟な本性能がまじっていたにちがいないから、同じ折檻を彼女の兄からうけても、わたしには少しも快くは感じられなかっただろうと思う。しかし兄さんのほうの気質からいって、この人に代わられたところで別に恐ろしくもなかったから、わたしが折檻されないようにつつしんだのは、まったく、ランベルシエ嬢を怒らせたくないからだ。わたしの場合、好意をもつといえ、その感情がこんなにつよく働くのだ。それがたとえ感覚から生じた好意であっても、そうなので、またこの感情がいつも心の中で感覚を制御するのである。

二、わたしがべつに恐怖心からでなく避けるようにつとめていた体刑を、また加えられる機会が、わたしの失敗からではなく、つまりわたしの意志からではなく、ついにまたやってきた。そこで、いわば少しも心のやましさをなく、それを味わうことができた。しかしこの二度目がついに最後になった。ランベルシエ嬢はたぶん何かの様子で、この折檻は役に立たないと気がついたらしく、あまり疲れるからこんなことはもうしない、とはつきりいった。わたしたちはその時まで彼女の寝室で、冬などとはときどき同じベッドにさえ寝かされていたのだが、二日後に別の寝室にうつされた。今後は大きくなった少年としてあつかわれるという、うれしくない名誉をわたしは得たのだ。

三、八つのときにこの三十歳の独身の婦人からうけたこの子供の折檻が、わたしの好みや欲望や情熱、その後のわたしまで、すっかり決定したということ、しかもそれが当然予想されるものと反対の方向をとったということ、誰がそれを信じてくれよう。感覚は目ざめたけれども、わたしの欲望はうまくだまされて別の方向にすすみ、自分の経験の範囲内にきざられて、それ以外のものを追求しようとはしなかった。ほとんど生まれたときから肉感に燃える血をもちながら、わたしは、どんなに発育の遅い冷やかな氣質の人でも一人前になる年ごろまで、あらゆるけがれから純潔に身を保つことができた。なが年のあいだ、わけも知らずにもだえて、美しい女のひとを熱烈なまなざしでむきほらながめていた。わたしの想像はたえずその姿を思い浮かべさせたが、それはもっぱらイメージを自分の好きなように働かせ、どの女もこの女も、ランベルシエ嬢にしてしまうのだった。

四、結婚期を過ぎてからも、この変てこな、

執拗な、偏執、狂気といったいいほど強くなつた好みがあり残っていて、素行の純潔を失わせそうで、かえってそれを守る結果になつた。つつましく純潔な教育といえは、わたしのうけたのはまさにそれである。わたしの三人の叔母は申し分なく品行方正だつたばかりでなく、いまの女性がとくに忘れてゐるつつしみを心得ていた。享樂好きの人だとはいへ、父には昔かたぎな礼儀正しさがあつて、好きな女たちのそばでも、処女が顔を赤くしそうな言葉は決して使わなかつた。わたしの家では、またわたしの前では、そうしたことで子供に氣をつける習慣は、よそで見られぬほど慎重だつた。この心づかいには、ランペルシエさんの家でもおなじで、たいへんいい女中が、うっかりわたしたちの前で少しみだらな言葉をもらしたというので、暇を出されてしまった。わたしは一人前の若者になるまで、両性の結合について明白な考えをついぞ持っていなかつたのみではなく、そういうぼんやりした觀念も、いつもいとわしくけがらわしい形で頭にうかんでゐた。商売女というものにもつた嫌悪は、その後もついに消えなかつた。放蕩者は、輕蔑を、恐怖さえ感じずに見ることができなかつた。放蕩にこんなはげしい嫌悪をもつようになったのは、ある日、くぼ道を通じてプティ・サコネへ行く途中、両側にある洞穴を見たとき、あのふたりはやつてゐるんだと聞かされたからだ。それからこういう行爲を思うと、犬のしわざを見たことがいつも連想さ

れて、思い出すだけで胸がわるくなる。

五、こういう幼い時にうけた教育上の先入主はそれ自体、燃えやすい氣質の最初の激発をおくさせるものだが、それが、さきにいったように、最初の春の目覚めから生じた異常な性癖によつて強められた。若い血のたぎるのをあましながらも、感じたことしか想像できないわたしは、自分の欲望を自分の知つてゐる種類の逸案にしか向けることを知らず、嫌悪を感じるようになってゐた逸案のほうへは決して進まなかつた。實際は、わたしは少しも氣がつかなかつたけれど、この二つは非常に近いものだったのだ。おろかしい妄想や色情的な興奮においては、またそんな場合にときどきやつた非常識な行爲において、わたしは想像の上で異性の力をかりたけれど、それが自分が現に利用しようとして夢中になつてゐる方法以外に用ゐられるものだと、かつて思ひもよらなかつた。

六、だから、わたしは、非常にはげしい、みだらな、早熟な氣質をもつていながら、ランペルシエ嬢が何の氣なしに教えてくれたもののほかに、少しも肉感的な快楽を求めることもなく、知ることもなく、思春期をすごした。そればかりではない。年月がたつて大人になつてからも、身の破滅となるべきはずのものが、かえつてわたしを安全にくれた。昔の少年時の好みが消えうせるところか、またほかの好みとすつかり合体してしまつたので、それを感覺によつてよびさまされる欲望からどうしても切りはなす

ことができなかった。この異常さが、わたしの天性の臆病と一つになつて、大胆になにも打ち明けえず、なにもやれないために、女のそばではいつも内気な人間にしてしまつた。肉体的な享樂はわたしにとつて終着点にすぎず、それとは異なる種類の享樂は、それを求める人間が無理にうばうこともできず、といつて、それをあたえる女から察してもらうわけにもゆかぬからだ。こうして、わたしはいつも自分のもっとも愛する女たちのそばで、渴望しながら沈黙して、一生をすごしたのだ。自分の好みを告白できず、いくらかそういう氣持をのこすような交際で、その好みをいささか慰めてゐた。横柄な恋人の膝下にひざまずいて、その命令に従ひ、赦しをこう、そういうことがわたしにはたいへん楽しいことだつた。活潑な想像が血を燃え立たしていけばいほど、わたしはますます内気な恋人のような格好になる。こんな恋の仕方はあまり事をはかどらせず、相手の婦人の貞操には危険なものでないことが察しられよう。したがつて、わたしが自分のものにしたい女はごくわずかだつた。しかし、それでもわたしは十分自己流に、つまり想像で、享樂はしてゐたのだ。わたしの感覺がわたしの臆病な気分や小説風な精神と相まつて、わたしの感情を純潔に、品行を正しく守つてゐてくれたのは、こういうわけだ。同じような好みが、もう少し厚かましい性質と

(一) 實際は、ルソーは十一歳、ランペルシエ嬢は四十歳ちかくであつた。

結びついていたら、もつとも野獣めいた逸樂の中にわたしをおとし入れたかもしれない。

七、わたしは、わたしの告白の暗い泥だらけの迷路の中に、じつに苦しい第一歩をふみこんだわけである。いちばんいいにくいことは罪のあることではなく、滑稽な恥ずかしいことなのだ。もう今は自信ができた。今までのことを思いきっていった以上、もうわたしを止めるものは何もない。このような告白をするのがどんなにつらかったかは、わたしは一生を通じて、眼も見えず耳も聞かなくなるほどの情熱に狂い、前後を忘却し、全身をわななかなせるほど愛した人の前に出ても、決して自分のこの痴情を打ち明けることができなかったこと、もつともうちとけた時でも、このいちばんほしい寵遇を相手から求める勇氣のなかったことを考えて、推察してただけよう。そんなことは子供のときにただ一回だけあって、わたしと同じ年ごろの少女が相手だった。それも向うからすすんで持ちかけてきたのだ。

一、こうして感じやすいわたしという存在の最初の足跡までさかのぼってみると、ときには矛盾した外観を示しながら、やはりたがいに一致して単一な結果を力よく生みだした要素がいくつか見出される。また、表面は同じように見えても、種々の事情によって非常に異なった結果を生じ、互いのあいだに何らかの關係のあることが想像できないような別の要素も見出さ

れる。たとえば、わたしの精神のもつとも雄々しい原動力の一つが、わたしの血の中に淫蕩と柔弱さを注ぎこんだのと同じ源泉から発しているとは、誰に信じられようか。いま話した主題をはなれないで、そこからたいへんちがった印象が生じることを、お目にかけよう。

ある日、わたしは台所につづいた部屋で、ひとり学課を勉強していた。それよりさきに、女中がランベルシエ嬢の櫥を壁のくぼみのところに乾かしておいた。女中が取りにもどつてくると、その櫥の一つが片側すっかり歯が折れていた。誰がいためたのだらう？ わたしのほかに部屋に入つたものはなかった。わたしが尋問された。わたしは櫥なんかさわらないという。ランベルシエ兄妹は二人して、わたしをいさめ、白状をうながし、おどかした。わたしは頑強だった。わたしがこんなに図々しくうそをつくのは見初めだとは思つたものの、みんなはわたしのしわざと信じきっているから、いくら抗弁してもきいてくれない。事は重大化した。それも当然だ。いじわる、うそ、剛情、どれもみな一様に罰せられていいことだと考えられた。が、この時はもう折檻役はランベルシエ嬢ではなかった。手紙でベルナル叔父が呼ばれ、やつてきた。ちやうど従兄弟もわたしのと似たような不始末をやつていたところなので、二人いっしょに罰をうけることになった。恐ろしい罰だった。たとえそれが病氣そのものの中に療法を求めるやり方で、わたしの異常な肉感を根絶してやろ

うというのだったとしても、これにまさるやり方はなかっただらう。事実、そうした肉感はいくら長い間わたしを悩ますことはなかった。

いくら責めてみてもわたしを白状させられなかった。幾度か折檻はくりかえされ、この上ないひどい目にあったけれど、びくともしない。わたしは死んでも堪える氣だった。そして死ぬ覚悟だった。ついに暴力そのものも子供の悪魔のような剛情つばりに負けざるをえなかった。わたしの不動の態度をみなはそういうふうに形容をしたのだ。この試験でさんざんな目にあったが、しかしわたしは勝つた。

この出来事から五十年ちかくたつ。そして今日わたしはそのことで、もう一度罰せられる恐れはない。よろしい、わたしは天に向つて、公言しよう、わたしは無罪であつた、わたしは櫥をこわしもせず、手でさわりもしなかった、そばに近づきもせず、またそんな氣もまったく起こさなかった。それでは、どうしてこわれたのか、それは問わないでほしい。わたしは知らないし、考えてもわからない。わたしの非常にはつきり知つてゐることは、わたしがこのことで罪がなかったことだ。

ふだんは臆病で従順な、しかしいったん熱情をもつとはげしく、傲岸で、手におえなくなる性格を想像してもらいたい。つねに理性の聲にみちびかれ、つねにやさしく公平に親切にとりあつかわれて、およそ不正という觀念すら知りもしなかったのに、生まれてはじめて、しかも